

リビングマガジン 福生

2

芸術・文化編



杉山 行男さん

「本来、第九には春がふさわしいんです。ベートーベンが第九を初演したのが、若葉が萌える5月だったのですから」。杉山行男さんが団長を務めるふっさ第九市民合唱団の演奏会は、言葉通り、早春に行われています。

そもそも、合唱団が結成されたのは3年前、市制20周年を記念して、大勢の市民が集まってできること、その答えが第九だったというわけです。市民から団員を募集したところ、小学生から7代のお年寄りまで、幅広い層の約200人から応募があったそうです。

「プロのオーケストラを招くからには、こちらにも本格的にやろうということで、練習をはじめました。歌詞がドイツ語なので、みんなが覚えるのに時間がかかり、一時は発表できるのだろうかかと不安にかられたときも…。練習に次ぐ練習、そして合宿も行い、団員のみなさんは世代を超えて息もぴったり合うようになり、演奏会は大成功をおさめました。

当時はまだ団員のひとりだった杉山さんは、このすばらしい合唱団をなんとかして継続したいと考え、以後、合唱団の運営に熱心に取り組み、団長に。

「市内出身のプロの音楽家から、次の年からはぜひ参加させてほしい、という連絡が入ったときには感激しました。市内には、地元でなんらかの活動ができればと思っているたくさんの方の芸術家たちがいるはずだ」。

秋から冬にかけての土曜、日曜は毎週練習となり、第九三昧の日々となる杉山さんは、近い将来、ジャズコンサートもやってみたくて夢をひろげています。



佐藤 文子さん

「山歩きをしていて、ふと美しい山野草を手元に置きたくなって…。そんな素朴な気持ちが佐藤文子さんをボタニカルアート(植物細密画)へと誘いました。

花びら1枚1枚、葉脈の1本1本を、精巧に描いてできあがった作品はまるで写真のようです。虫喰いあとや枯れかかっている部分も忠実に描くというのも約束ごとのひとつ。自然の姿を自然のまま描くというのが、ボタニカルアートの意味深いところだ。

福生市でボタニカルアートの講座が開かれた折、佐藤さんは地元でもう一度初心にかえて、基礎を学んでみようと思い立ち講座に参加。講座終了後、そこで知り合った有志で「SASAの会」をつくりました。

「SASAとは笹のこと。地味なりにも、しっかり根をはって描いていこうという、メンバーの気持ちをグループの名まえにしました」。

現在、この会のメンバーと市内でグループ展や勉強会などの活動を活発に行っています。

また、佐藤さんは、5年前から福生市の「広報ふっさ」の野草のコラムを担当。四季折々の野草が、愛情をこめた細密画と文章で綴られ、紙面にやすらぎを与えています。

「消えゆく野草を絵に残しておきたいという市の意向を受けて、今、福生の野草展の準備をしています」。このほか、短歌の同人誌の表紙、山の会の同人誌の扉などにも作品を描いており、多忙ながらもいきいきとした佐藤さんの笑顔が印象的でした。



向山 千絵さん

向山千絵さんが市民劇団「バックス」に所属したのは中学2年生のとき。小学校、中学校とも市外に通っていたため地域との関わりが希薄だったという向山さんが、地域のいろいろな活動に目を向けはじめたころ、市の広報を通じて市民演劇講座が開かれるのを知り参加しました。

「バックス」はこの講座終了者が集まって結成した劇団で、向山さんも当初からのメンバーのひとり。早稲田大学で東洋史を専攻し、学内のモダンジャズ研究会というサークルにも所属していた行動派です。

「とてもいい仲間にも恵まれています。18歳から50代後半まで、年齢も職業も違った人たちとの活動を通じて、学校では得られない貴重な社会勉強をさせてもらっています」。

衣装や大道具、パンフレットに至るまですべて手作り、しかも時間的な制約のなかで練習——と、苦勞は多いものの、いろんな立場の人が集まってひとつの芝居を創り上げていく市民劇団ならではの楽しさもあるといいます。

昨年の「たちかわ演劇祭」と劇団の定期公演で上演した『中二階のある家』(チェーホフ作)では、革命に燃える女性、リダという役を演じた向山さん。

「今までは学生だったこともあり、劇団の運営などほんとうに大変な部分には関わってこなかったのですが、今後はそういう面でも活動していきたいですね」と力強く語っています。

この春に社会人となった向山さんにとって、「バックス」の活動から得た経験はかけがえのない財産になることでしょう。